

# 7. 私のともし

敦賀市立赤崎小学校

6年 和田 実寿穂

↓

各務原市立稲羽西小学校

6年 岩井 育実 岩井 咲希 永縄 ひかり

横井 美里 奥村 朱利

チュン、チュン、チュン、チュン。

「おめでとう！ 新しい友達ができただね」

彼女の名前は、松下あおい。ごく普通の小学生……なんだけれど、すごい特技を持っている……。それは、誰にも秘密にしている……。

「あおいー、ご飯のしたくができたわよー」

「はーい」

あおいが、お母さんに呼ばれて、リビングにやって来たら、お父さんがいた。いつもなら、仕事で朝が早いのに。

「お父さん、会社は？」

「今日は休み。あおいも学校が休みだったら、あおいの大好きなペットショップに連れて行ってやるのになあ。残念、残念」

お父さんは、そう言いながら、新聞を読んでいる。

あおいは、

「残念……」

と言い、ご飯を食べる。あおいは、動物が大好き。だから、しょっちゅうお父さんにペットショップへ連れて行ってもらう。何より、あおいの大好きな時間だ。

ご飯が終わったら、ランドセルをしょって、学校へ。

「いってきまーす」

「行ってらっしゃーい」

あおいは、いつも元気いっぱい！ 登校中いつも考えるのは大好きな動物のこと。

学校でも、係はもちろん飼育係。今日も、動物たちのことで頭はいっぱいだ。

(今日こそ、凶暴ウサギのピッチャと仲良くなるぞ！)

そんなことを考えながら学校に向かう。

そして、そのときがやってきた。

ピッチャは、今日も小屋の中で暴れている！

「よーし。ちょっと怖いけど、がんばって仲良くなるぞ！」

あおいは、ピッチャに近付いていく。

「え？ 何だって？ 『お腹が空いてるから、早くエサくれ』 だって？ もー、しょうがないなあ」

あおいは、ブツブツ言いながら、ピッチャのエサを準備した。そのエサを差し出すと、飛びつくような勢いでエサを食べるピッチャ。

これは偶然かしら。あおいが思った通りのことが目の前で起こっている。

「何、ピーチ？ 元気ないねえ、ん？ 『この小屋の中をきれいに掃除して』だって？」

独り言を言いながら、あおいは作業を続けている。このピーチとは、ピッチャの妹のことで、反対から言うとピッチャは、お兄ちゃんに当たる。

あおいは、掃除道具を持って、ウサギ小屋の中の掃除を始めた。きれいに、すみずみまできれいに……。

掃除がおおかた終わりに近づくと、元気のなかったピーチは、さっきまでの様子がウソのように、小屋の中を元気よく走り回っているのである。

これも偶然かもしれないが、全てのことが、あおいが思った通りに目の前で起こっていく。

今度は、ラビという、ピッチャとピーチの友達に、何か言っているようだ。

「ラビ、今日は、元気いっぱいだねえ。何かあったの？」

「キュウキュウ、キュウキュウ、キュウー」

「へえ。ラビにも、新しい友達ができただ。そういえば、朝、スズメの子とお話していたら、『新しい友達ができただ』って言ってたの。ラビと同じだね」

「キュウキュウー」

ラビは、キュウキュウと言いながら、とても喜んでいる。

これは、きっと、偶然ではない。いや、絶対に偶然なんかじゃない。あおいは、動物と話ができるに違いない！

という事は……あおいの特技とは……そう！ 動物と話をする事だったんだ！

でも、どうして、そんなにすごい能力を自慢することもなく、秘密にしておくのだろうか？

「キュウキュウ、キュウキュウ」

ラビが何か言っている。

「え？ どうして、私が動物と話せるか？ ……そうだなあ、どうしてもは分からないけど、小さいときから……。誰かにこの秘密を言ってもいいけど、きっとみんな信じてくれない。それどころか、下手すると、あいつは頭がおかしくなった……なんて言われてしまうにちがいない…」

「キュウー」

ラビは、フーッとため息をついたときのような顔をして鳴いた。

そのとき、人がじゃりの上を歩く音がした。あおいは、今までのことを聞かれていないか、すごく心配になって、ドキドキしていた。

その足音は、まさにあおいの後ろで止まった。そして、

「ごめん。聞きちゃいけなかったかもしれないけど、あたし、全部聞きちゃった。あおいちゃんって、動物としゃべれるんだ」

高い声がする。最も心配していたことが起こった。あおいは、ドキドキしながら、その声のするほうを向いた。

背が高くて、長い髪の毛を二つにくくっている。声を聞いただけでその子が、誰か分

かったけれど、動物と話せるって事が変なうわさになるのがいやだったから、しばらく黙っていた。

「やよいちゃん？」★

あおいは、ショックで走ってどこかにいってしまった。

家に帰ったら、お母さんが、

「おかえり。ずいぶん早かったね」

でも、あおいは、だまったまま、自分の部屋にとじこもってしまった。そして、うとうとはじめた。ZZ……。

『あおいー、おまえ動物としゃべれるんだろー』

『ありえねーよな』

『信じられない』

『今、ここでやってほしいよねー』

『ウソだ。ウソだ。ウソだ』

バサッ！！

と目がさめた。あー、夢だったのか……と思った。学校に行く準備をした。

「いってきまーす」

がんばって明るく言った。なぜなら暗いと、みんなに「どうしたの？」と言われるからだ。

そう思っているうちに学校についてしまった。

「おはよー」

と言ってつくえに教科書をいれていると、

「あおいちゃん、昨日はごめん」

ふり向くと、そこにいたのはやよいちゃんだった。

「別に気にしていないからいいよ」

と言った。でも、あおいの目にはうっすらと涙があった。

放課後、あおいは小屋の前にいた。

「昨日はとちゅうで帰っちゃってごめん」

とピッチャに話しかけるが、ピッチャは何も答えず、穴の中に入ってしまった。ピッチャおこっているのかなぁと思いながら家に向かった。家の前に、この間友達ができたスズメの子がいた。

「今日は何して遊んだの？」

「チュン、チュン、チュン」

と言ってくれたが、何を言っているのか分からなかった。

夜ご飯を食べながら、なぜ話せなくなっちゃったのだろうと考えていたら、

「お母さんの昔のころの話、してもいいかな」

「う、うん」

「お母さんね、小さいころ動物と話すことができたの。そのころの友達は、動物しかいなかったの」

「えっ、えー、そうだったの！」

「それでね、六年生の夏休みになる前に、いきなり、話せなくなったの。すごく不安だった。でもね、それから、クラスの子や同じ学年の子と仲良くできて友達になったの。そして、いっぱい遊んでとても楽しかったわ」

「そっ、そんな事があったんだ……」

そして、あおいは、考えた。

「そうだ！ 私も人間の友達をつくれればいいんだ。もっともっと」

「お母さん、お父さん、おはよー」

「おはよー」

「あおい、元気になったなー」

とお父さんが言った。

「そっ、そう」

そして、学校に行った。

「おはよー、あおいちゃん」

「おはよー」

やよいだった。今日は、元気そうじゃん。よかった、とやよいは思った。

「あのね、私、今日から友達をもっともっといっぱい作ろうと思っているの」

「そっ、そうなんだ。がんばってね。あおいちゃんなら、絶対できるよ」

「ありがとう」

あおいは笑顔でいった。

「……私って、あおいちゃんの友達だよ」

やよいちゃんは、すごく不安な顔だ。

「もちろん、友達の一部だよ」

と元気に言った。

それから、あおいは、たくさんの友達ができる。買い物に行ったり、遊園地に行ったり楽しんだ。

そして、月日はたち、いよいよ卒業式の日になった。

「あおいちゃん、カワイー」

やよいちゃんが言ってくれた。

「ありがとう」

卒業式の後、小屋の前を通った。

「みんな、六年間ありがとう」

小屋には、だれもいなさそうだ。

トントン。

「あおい、卒業おめでとう」

「だれ？」

そーっと後ろを向いた。すると、そこに立っていたのは、

「ピッチャとピーチ、ラビ、スズメの子！」

みんな笑っている。すごくうれしかった。

「みんな、本当にありがとう。中学生になっても、遊びにくるね。友達だよ」